

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

毎年の“神の母聖マリアの祭日”とそれに続く“主の公現の祭日”に朗読される聖書日課は、A年もB年もC年も(三種類ではなくて)同一のものが用いられます。そのことがこの二つの祭日の性格を私たちにより明瞭に感じさせるのであります。

今朝朗読された旧約聖書、使徒書、福音書の日課の中には、三種類の登場人物がいます。その第一は“アロンとその子ら”(民 6:23)であります。

1. 民

“アロンの子孫である祭司”は、神の民イスラエルにとって、その歴史のどの過程においても決して切り離すことの出来ない存在でありました。なぜならイスラエルの神ヤーウェはモーセの口を通して、“アロンの子孫である祭司”をその民の祝福のための器としてお定めになっていたからです。

v.27 「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。」

このことは言い換えれば、地上のイスラエルが歴史上の幾多の変遷を経てなおヤーウェの民であり続けることが出来たのは、そこに“アロンの子孫である祭司”が途絶えることがなかったからであり、そこに私たちは救済史を導き給う父なる神の力強い御手を見るのです。1月1日の神の母聖マリアの祭日の旧約聖書の日課に、この民 6:22～27 が選ばれていることに、私たちは深い神の摂理の御手を覚えます。

イスラエルの神である主は、その民を訪れて、救いの角を僕ダビデの家から起こされたのであり、その出来事の中で聖マリアは“神の母”となるように選ばれたのでした。

2. ルカ

第二の登場人物は天使です。ルカ福音書はその名をガブリエルと呼んでいます。東方教会に比べると西方教会ではこの天使はそれほど重要視されていないようですが、しかし決してこれは降誕物語りの中の単なる飾り物ではありません。むしろ天使ガブリエルは、受胎告知と降誕の告知において決定的な役割を神から与えられたものとして、福音書には描かれています。

降誕の物語りにおいて、天使の出現は神御自身の到来のしるしでありました。天使ガブリエルが羊飼いたちに近づいたとき、そこには神の栄光が照らしました。天使が神の子イエスの誕生の知らせを告げたとき、主の降誕に関わるもろもろの神の御計画が現実の出来事となりました。そしてこの告知する天使ガブリエルに天の大軍が加わって、神を賛美して歌いました。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」(2:14)

天使の登場は、神の救済史における終末的な御業の実現のしるしでありました。これは決して童話的な

ファンタジーの一場面などではないことに、私たちは十分留意しなければなりません。

3.

第三の登場人物はマリアです。

“神の母” となられたマリアのことを私たちは思います。神でも天使でもなく、私たちと同じ庶民の一人として、すなわち等しく律法のもとに生まれた一人の女として、聖書は彼女のことを描いています。彼女はシビ族の出身でありましたが、ユダ族のダビデの子孫であるヨセフの婚約者となり、二人が一緒になる前に聖霊によってイエスを身ごもりました。彼女が御子イエスを出産した場所はエルサレムの王宮ではなくて、ダビデの故郷である田舎町ベツレヘムという小さな村でありました。

“神の母” となられた聖マリアは、今朝の朗読聖書の中の最も重要な登場人物であります。しかし、彼女は決して降誕の出来事の主人公ではなかったことを、私たちは忘れてはなりません。私たちが聖母マリアへの祈り(アヴェ・マリア)で唱えるように、彼女は「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」(1:28)「あなたは神から恵みをいただいた」(1:30)と天使に告げられた女です。代々の教会と共に私たちも彼女のことを「幸いな者」(1:48)と賛美します。今日の祭日にその聖マリアから私たちは、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じる」(1:45)ことを学びます。救済史を導き給うイスラエルの神に賛美！

私たちは今21世紀という新しい時代に入っていきます。神はその救済史の御業をどのようにお進めになるのでしょうか？ キリスト教は……、私たちの教会は……これからどうなっていくのでしょうか？

v.19 「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」

私たちもマリアと共に、信仰の従順の道を歩んで行きましょう。

v.21 「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。」

神の救済史は、御計画通りに確実に一步一步進んで行くのですから。

アーメン、ハレルヤ。

1月7日 主の公現

イザ 60:1~6 エフェ 3:2~6 マタ 2:1~12

1. マタ

東方の学者たちが幼子イエスを拝みに来たというマタイ福音書の物語りは、主の降誕の祭を締めくくる主題として、早くから教会はこれを“主の公現の祭日”という名で祝って来ました。主の降誕も、主の公現も、神の救済史の大いなる展開の開始の出来事でありますから、現代の私たちの信仰生活も教会の祭儀も、これらの出来事と直接間接に連続性を持ち続けているとすることが出来ます。

v.2 「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

遠い東方の国でも見る事が出来るように、メシア誕生のしるしの星は出現しました。すべての人々が理解したり信じた訳ではありませんが、このようにメシアを拝みに来た東の国の学者たちもいたのです。そしてその物語りは喜びに満ちた物語りとなりました。神の“秘められた計画”の啓示は、恵みと真理とに満ちていました(ヨハ 1:14)。「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」(v.10)と記されているその天から来る喜びは、今朝の私たち一人一人の心にも広がっています。

私たちが主の降誕の祭を祝い、主の公現の祭日のミサをささげるとき、私たち教会は“神の秘められた計画”がキリストによって実現されて行く救済史の中を、今年も歩んでいるのだということを覚えます。私たちが黄金、乳香、没薬を献げた東の国の学者たちと同じ喜びの心で、主の奉献に添えて自らのささげものを捧げましょう。

2. エフェ

神の子イエスの受肉によって新しく始まった神の救済史の大いなる展開について、使徒パウロはたいへん分りやすく説明してくれています。

v.6 「すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束に与かる者(新しいイスラエル)となるということです。」

この“秘められた計画”と訳されている語は、ギリシア語の“ミステーション”で、神秘とか秘密を意味します。パウロはこの語を用いて、イエス・キリストが聖霊を通して使徒たちに啓示してくださった“秘められた計画”のことを語りました。それはキリスト以前の時代には隠されていたもので、今や私たち異邦人に与えられる大いなる救いの計画です。

主の公現の祭日に教会は、このキリストの“ミステーション”が私たち異邦人のために明らかにされたことを覚えて、記念のミサをささげます。教会がこれまで宣べ伝えて来た福音も、そして21世紀の教会がこれから宣べ伝えて行くべき福音も、この“秘められた計画”を実現されるキリストの福音以外にはありません。全世界のキリスト教会が、現代における「その方の星」(マタ 2:2)として、人々をキリストに導くため

に用いられるよう、一緒に祈りましょう。

3. イザ

神の“秘められた計画”は、現在進行中の神の御業です。地上の教会は一面ではこの世の闇に覆われています。信仰ではなくて人間の知恵が、神の国の福音ではなくてこの世の事柄が人々の心を支配しているように見えることがあります。

v.1 「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。」

キリストの祭壇を囲んでミサがささげられているところには、“神の秘められた計画”があります。それはやがて「輝き出で」「現れる」(v.2) のです。私たちのささげている地上のミサが、実は将来の神の国における礼拝の先取りであり、不完全で弱々しい地上のミサはその背後にある主の栄光輝く天上のミサに支えられているということを信じましょう。

21世紀の教会の福音宣教が、主の栄光に輝くものとなりますように。

アーメン、ハレルヤ。

1月14日 年間第2主日

イザ 62:1～5 1コリ 12:4～11 ヨハ 2:1～11

1. ヨハ

v.11 「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。」

毎年、年間の主日は第2主日から始まります。これは主の洗礼の祝日の翌日から年間が始まるので、最初に来る年間の主日はその第2週目の主日であるからです。

主日の朗読配分は、マタイ、マルコ、ルカの三つの共観福音書を三年周期で順に用いることになっていますが、年間の最初にあたる第2主日にはこの日だけは毎年、ヨハネ福音書からとられたテキストが朗読されます。A年とB年はヨハネ福音書第1章から、C年である今年は第2章の1-11節が配分されて、“神の子イエス・キリストの福音の初め”(マコ1:1)を飾っているのです。

ヨハネ福音書で「しるし」という言葉は、イエス・キリストの受肉と受難と復活による救いの御業を指し示す意味で用いられていて、“福音との結びつきを前提とする”独特な用語です。その「最初のしるし」(v.11)として、このカナの婚礼の物語りは今朝の典礼で朗読されました。

2.

その婚礼で、ぶどう酒が足りなくなっていました。イエスの母と、お客として弟子たちと共に招かれていたイエスとの間の vv.3-5 の対話は、このとき母だけがメシアとしてのイエスの秘密を知っていたということを暗示しているように思えます。しかしイエス・キリストの救いの御業はまだ現れていませんでした。

母はイエスに告げ、召し使いたちに指図をしました。それ以上でもそれ以下でもありませんでした。それがこの物語りのあるがままの姿です。

イエスの言葉にしたがって召し使いたちはかめに水を満たし、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きました。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をして、それがたいへん上等であったので、花婿に栄誉を帰したと記されています。

この奇跡そのものが“福音”であるのではなく、それがキリストの救いの福音を指し示す「しるし」であったというのが、ヨハネ福音書の説明です。そのような説明は、この物語りに登場してきた弟子たちやその他の人々が、キリストの復活後に誕生した教会の群の中において、共にミサをささげていたであろう共同体の存在を考えると、非常に説得力のあるものとなります。

召し使いたちも、宴会の世話役も、この出来事の中でそれぞれの役割を果たしています。しかし奇跡を起こしたのは彼らではありませんでした。そのようにキリストの救いの御業も、人の業ではありません。キリストの福音をそのようなものとして指し示す「しるし」が、このカナの婚宴での出来事でありました。

3. Iコリ

キリストの死と復活の記念であるミサを共にささげる群である教会に、聖霊はいろいろな賜物を与えてくださいます。

v.7 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。」

私たちの教会の場合も同様です。多くの人々にいろいろな霊的な賜物が与えられていて、それぞれが分に応じて教会の奉仕に参加しています。目立つ奉仕もあれば、ささやかで目立たない奉仕もあります。それらの多くの賜物が活かされることによって、教会はこれまで活動を続けて来ました。

聖霊は、キリストの体である教会を造り上げ(14:4 参照)て行くために、ミサをささげる群の一人一人にいろいろな賜物をお与えになります。「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって」(v.11)、決して人の業ではないことに注目しましょう。ですから私たちはどんなに熱心に奉仕し、また奉仕のためにどんなに多くの犠牲を払うことがあっても、教会を造り上げ、キリストの救いの御業が前進して行くのは、聖霊の働きによるのであり、神の御手によるのだということを決して忘れてはなりません。

4.

今年はC年で、主日の福音は主としてルカ福音書から朗読されて行きます。その“神の子イエス・キリストの福音の初め”の年間第二主日に、私たちは今年はヨハ2:1-11を聞きました。「弟子たちはイエスを信じた。」(ヨハ2:11) そのように私たちも、“神の子イエス・キリストの福音”を信じて歩んで行きましょう。

アーメン、ハレルヤ。

1月21日 年間第3主日

ネヘ 8:2~10 1コリ 12:12~30 ルカ 1:1-4, 4:14-21

1. ルカ

主イエスがガリラヤ地方で伝道をお始めになった頃のある安息日に、ナザレの会堂でも聖書を朗読してお話をされました。ルカ福音書は、このときにイエスがイザヤ書第61章を朗読されたことを伝えています。イエスの朗読が終わると、会堂にいるすべての人々は、次にイエスが語られる言葉に期待して注目しました。

v.21 「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

この“聖書の言葉”とは、この安息日のために配分されていた箇所であるイザヤ書第61章を指しています。当時の会堂で用いられていた聖書は羊皮紙の巻物で、左から右へと巻きながら順に読むように作られていましたから、係の人から渡されて朗読者がこれを開くと、ちょうどその日の予定の箇所が出て来るのです。主イエスが預言者イザヤの巻物をお開きになると、ちょうど第61章に当たる箇所が目にとまり、これを朗読されました。

現代の教会のミサで聖書が朗読されるときにも、神はその朗読を通して私たちに語りかけてくださり、イエス・キリストによる救いを教会を通して実現されます。ミサにおける聖書の朗読というものは、そのような重みを持っているものなのです。

2. ネヘ

捕囚の地バビロンから帰還したユダヤ人たちによってエルサレムに第二神殿が再建されてから、既に120年近くを経ているBC.398年に、祭司エズラがモーセの律法の書を公布します。これによって、いわゆるユダヤ教という名称で呼ばれるイスラエル信仰共同体の新しい歩みが始まります。主イエスが地上を歩まれた当時の各地の会堂で、安息日ごとに聖書が朗読されていたその起源がここにあります。

私たちキリスト教会が聖書を非常に大切に、ミサにおける聖書の朗読を通して神のこばを聞くということの背景には、このユダヤ教の会堂における安息日の聖書朗読の伝統があります。キリスト教会はユダヤ教からこの伝統を受け継いだのでした。今朝の第一朗読にネヘ 8:2-10が配分されていることから、そのことが理解出来るでしょう。

聖書の朗読には、その解説である説教が伴っていました。(w.7-8)

v.9 「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。」

聖書の朗読がなされ、説教があって、会衆が神のこばを聞く……。安息日はそのことのためにささげられた聖なる日であるという理解も、今日キリスト教会が主日の理解に当てはめて受け継いで来ているものです。

3. ルカ

w.18-19の“わたし”とは、だれのことでしょうか。

イザヤ書第61章においては、それはBC.5世紀に語った預言者自身のことでありました。しかしルカ福音書では、イエスがナザレの会堂でイザヤ書第61章を朗読されたとき、これを御自身のことを指す預言として理解されたと考えているようです。

私たちのミサでは福音書の朗読は助祭または司祭の務めです。第一と第二朗読の箇所を朗読奉仕者が、福音書を助祭または司祭が朗読し、そして司祭が説教するとき、その朗読と説教を通して神のことばが実現します。その意味で w.18-19の“わたし”は主イエス・キリストを指すと同時に、ミサにおいて福音書の朗読と説教をする司祭にも当てはめて理解することが出来ます。

神の子イエス・キリストの十字架と復活によって成し遂げられた罪の赦しと永遠の命の福音を人々が聞くことが出来、それに与かって救われるために、父なる神はミサにおける聖書の朗読と司祭の説教を用いて働いてくださいます。

v.21「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

これはかつてのナザレの会堂においてだけではなくて、現代の教会のミサで聖書が朗読されるときにも再現されるのだということを理解しましょう。“ことばの典礼”とは、そのようなものなのです。

私たちのミサで聖書の朗読奉仕をする人たちのために、また福音書を朗読し説教する司祭のために、主の恵みと助けを祈ることは私たち一同の務めではないでしょうか。これらの奉仕者がそれぞれの役割の務めを通して、「主の恵みの年を告げるため……」(v.19)に用いられますように。

私たちミサに集まった会衆は、聖書と説教を通して語りまた働き給う主イエス・キリストに、今朝も目を注ぎます。(v.20) アーメン、ハレルヤ。

1月28日 年間第4主日

エシ 1:4-5,17-19 | コリ 12:31~13:13 | ルカ 4:21~30

1. ルカ

w.21-22 「ここでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて……。」

イエス・キリストの福音は、キリストの贖罪の愛の福音であります。それはイエス・キリストを町の外へ追い出し、山の崖から突き落とそうとし、最終的には十字架にかけた罪人のところに訪れました。w.28-29は、イエスを十字架につけると叫び、ついにピラトによる処刑を勝ち取ったユダヤ人たちを象徴する句であると考えられています。キリストの福音は、そのような罪人たちのただ中に訪れてくださることを、思いましょう。

過去の西欧の歴史において、罪深いユダヤ人はキリストを十字架に追いやった民族であり、それに対してユダヤ人以外の一般のキリスト教徒たちはそのような罪とは縁のない人種であるというような浅はかな理解が、人々の心を支配していました。

イエス・キリストはすべての人の罪のために御自身を献げてくださったのであり、ミサをささげる私たちは、キリストの十字架は他ならぬ私たち自身の罪のためであったことを知っています。ですから、そのような罪深い私たちのところにイエス・キリストの福音は今朝も訪れて来てくださっていることを、私たちは感謝しましょう。ナザレの会堂で憤慨し、総立ちになってイエスを追い出した会衆の姿は、実に救いに与かる前の私たち自身の姿にほかならないからです。

2. コリ

今朝のルカ福音書の物語りで、イエスの郷里ナザレの人々に欠けていたものは、イエスをキリストと信じる信仰と理解でした。そのように私たちの教会でも、しばしば何かが欠けていると、キリストの贖罪の愛の福音が実を結ぶような教会造りが出来なくなります。

教会を造り上げて行くために、父なる神は一人一人の信者にいろいろな賜物を与えてくださいますが、その多くの賜物、多くの奉仕の働きが良い実を結ぶための基本的な要素として、使徒パウロは“信仰”と“希望”と“愛”の三つを取り上げています。「その中で最も大いなるものは、愛である」(v.13)と述べられている“愛”について、多少の考察をしてみましょう。

言うまでもなく聖書は抽象的に“愛一般”について論じているのではなく、イエス・キリストの贖罪の福音に関わる“愛”を、ただそれだけを語っています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ3:16)は、最も有名な“愛”の説明の一つです。そして、「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ロマ5:8)と述べることによって、使徒パウロは私たちがどんなに深い罪の淵から救い出されたかを説明しました。

キリストを十字架にかけたのはユダヤ民族であって、我々はそのような罪とは縁のない人種であるというような浅はかな理解は、聖書とは全く無縁なものです。

このイエス・キリストの十字架における神の愛が出発点になって、救われた民である教会がこの愛に応答するものとして、ここでは“キリスト者の愛”が取り上げられています。1コリ13章で取り上げられているのはキリスト者の愛、私たちの愛です。それは“信仰”や“希望”と並んで、教会を造り上げて行く必須の要素です。

ここで私たちは、ミサ典礼書の総則第一章1の次のような言葉を思い起こしたいと思います。

「そして、他の聖なる行為とキリスト者の生活のすべての行いはミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている。」

今朝の使徒書の日課である1コリ13章が述べている“愛”も、教会が主日ごとにささげるミサと固く結びついているものとして理解しましょう。このような理解が、“教会を造り上げて行く(エフェ4:12)”ことと、聖書が語る“愛”とを結びつけてくれます。

4.

福音を語ることはいつも、会衆自身の罪を語ることと表裏の関係にあるものです。イエス・キリストの救いは罪と死からの救いであり、私たちはその罪と死の淵からキリストの十字架のいけにえによって贖い出されました。罪とそれに対する神の裁きとは、決して縁遠い事柄ではなくて、まさに私たち自身に関わるものであり、キリストの救いはその罪と死の中からの救いでありました。

「憐れみ豊かな神は、……その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、……あなたがたの救われたのは恵みによるのです……。」(エフェ2:4-5)

エレミヤは、南王国ユダに神の裁きとしての滅亡を語る者として召された預言者でした。システーナ礼拝堂のミケランジェロによる天井画の一角には、“悩めるエレミヤ”が描かれています。しかし神の裁きを語ることは、実はそのことによって、裁きの中から御自分の民を救い出してくださる“神の愛”を語ることと表裏をなしていました。

「遠くから、主はわたしに現れた。わたしは、とこしえの愛をもってあなたを愛し、変わることなく慈しみを注ぐ。おとめイスラエルよ、再び、わたしはあなたを固く建てる。」(エレ31:3-4)

イエス・キリストの十字架における神の愛への応答である、私たちミサをささげる民の“信仰”、“希望”、“愛”を、忍耐強く追い求めて行きましょう。

アーメン、ハレルヤ。